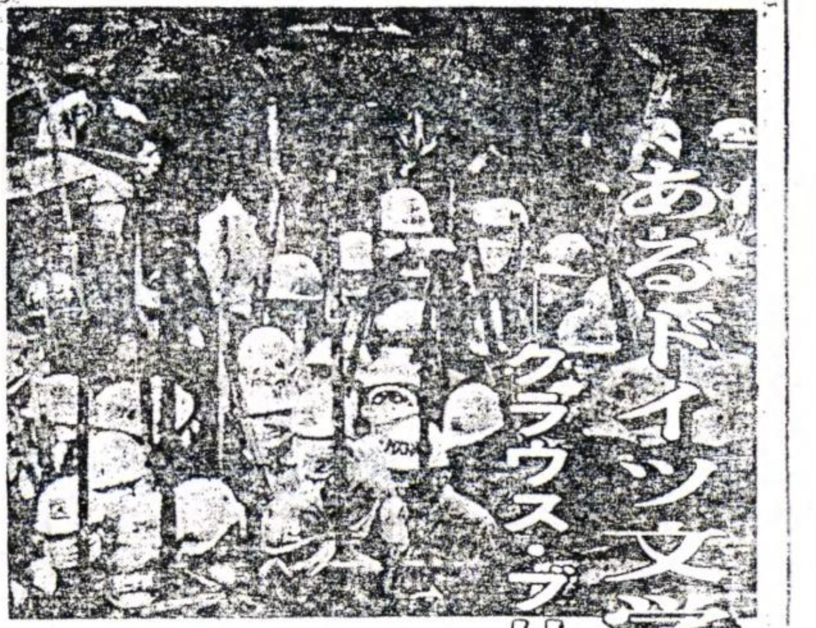


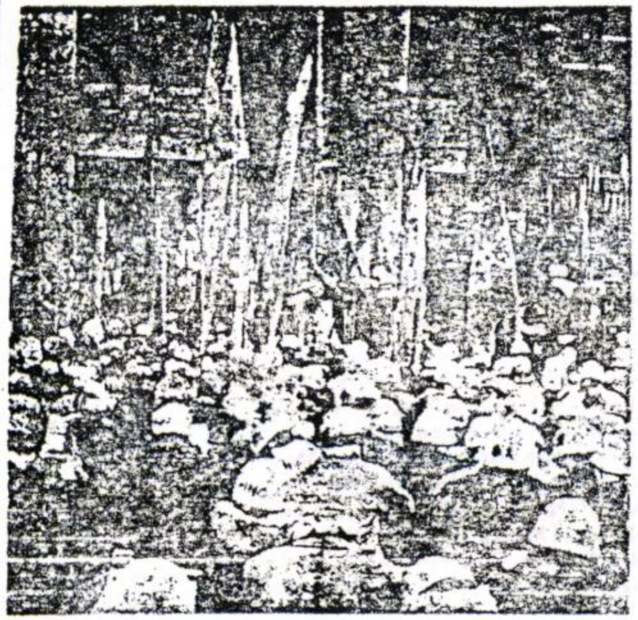
あるドイツ文学者の闘争とハイネ論
―クラウス・ブリークレープ『文学と探求』より

日大・東大にはじまり全国の大学へと波及した大学闘争から既に約一〇年。大学・学問・社会について根源的問いかけをおこなってたち上がった学生たちとともに、一人の大学教官がたち上がった。彼はバリケードを築き、大学・社会のあり方そのものを問う自主講座を開き、その容疑で逮捕され、大学からは「免職」された。その人の名は松下昇。

以下の文献は、ドイツのハンブルグ大学教授クラウス・ブリークレープ氏が、その著「文学と探求」の中で、松下氏の闘いとそのハイネ論について紹介している部分を、「自主講座実行委」が翻訳したものである。この中では、これまであまり紹介されてこなかった松下氏の闘いに、独自の視点が示されている。

また、この翻訳作業そのものが前半は、神戸大学で、後半は京都大学でと文中にあるように、松下氏のこの一〇年の闘いそのものであったこともあわせて記しておかねばなるまい。

なお、この「自主講座実行委」と松下氏について野村修氏（京大教養部教授・独語）に説明を付け加えていただいた。（編集部）



▽……共同性について……△

まだ語ることばをもたない大衆の共同性に対する知識人の位相は孤立したままであり、知識人の一部は道具として機能する運動のはんらんする場を克服してはいるが、かれらの孤立は、大衆のあり方と際立った対比を示している。私が友人から聞いたことから始めると、知識人と大衆の分離は教条主義的な共産主義を拒否した日本の学生たちによって、より重要な状況において追求された。1968年の巨大な運動は、のちに暴力行為に加わっていないことが立証されたにもかかわらず、処分された学生の闘争から始まった。学生たちは、ある大きい大学の講堂を占拠し、警察が導入され、これに対するストが起こり、9カ月も続いた。最初の問いかけは、次第に深く、根本的になっていった。学生たちは、社会における大学・学問・教授・学生などの役割について考えはじめた。かれらは大学の全ての建物を占拠し、これらの問いを深め、自己否定するためにバリケードを築いた。この段階で共産党員の学生や一般の学生たちは、もはや共に行動しえなかった。かれらは、全学生の共同性が幻想であると述べ、最も低い段階の共同性を主張した。かれらは自己否定することなしに達成しうる共同性を求めたのである。このような状況において闘争するものたちの中で一つの合言葉が生まれた。それは「連帯を求めて孤立を恐れず！」である。

この合言葉は、すでに私がこの本で引用したことのある孔子の言葉の変形であり、私は日本の友人からその部分の翻訳をしてもらった。

「友あり、遠方より来たる。またたのしからずや／彼がアウト・サイダーで、彼のグループが小さくても、遠方の友を持て。我々が現在の状態で少数派に属し、数の上で乏しくても、何か普遍的なテーマをもっていれば、我々は遠くにも友人をもつことになるのだ。その友人は、もし我々が普遍的なテーマを忘れて、低い水準の窓口の上で生きているなら決してもつことのできない友人であり、我々が遠くからやってくるこのような友人と共通の問題を語るほどたのしいことはない。」

前記の合言葉にはげまされている時に、私は一人の日本のドイツ文学者の表現を手にすることがあった。それは、今手許になく、ヨーロッパへもって帰れなかったのであるが。かれの認識と行動、かれの先駆性、かれのハイネ像は、孤立したラディカル性を一瞬はっきりと認識させる具体性をもつものであった。日本において、教条にとらわれない、非暴力のアナーキズムが勢力をもつ時期は過ぎ去っている。今日では、その最先端の部分は権力によって圧殺されている。批判的な思考が自由に表現されればされるほど、権力の体制的思考は強固な形態をとり、自由な表現者に公的な拒否によって報復するのである（処分、非雇用）。日本では西ドイツの非雇用政策ほど卑劣な、過度の愚かさに至っていないとはいうものの、同じやり方はすでに組織化された原則になっていて、批判を封殺するのに十分である。しかしながら、バリケードに立てこもる学生たちが日本的なやり方で排除されている間、別の独自の人間によって身体的ラディカル性と徹底した問題提起を社会状況の最先端で展開する方法がつくり出されている。バリケード内部に存在するとある、ある敬けんさをもって[illegible]はこの本に、その人間の名を記す。松下昇が、その人間の名前である。私はまず、かれが大学から追放される過程に関して述べたい。

かれは1971年（正確には1970年）5月18日に、神戸大学で教室を占拠し、反大学の講座を開いたという容疑により逮捕された。かれは、それまでに何度も逮捕されており、総額2390（万）円の賃金カットを受けていた。1970年5月31日付のアサヒ・ジャーナルは、この講師の逮捕が、大学の管理者と警察の密接な共同作業によって強固されたものであると伝えている。この教師が連れ去られる時、学生たちは、とり立てて（抗議）しなかった。かれの同僚の一人は、自分は松下の言うことは、さっぱり理解できない、と発言した……。

「反抗する教師に対する処分の論理」というタイトルでアサヒ・ジャーナルは松下が3月22日と29日に東京、京都、九州、神戸のかれの共闘者を集めて、かれの研究室で行なわれた討論の記録を報道している。次にその中の一部分を示す。

▽……ある日本のドイツ文学者の闘争……△

かれは学生との共同闘争であり、かれ独自の闘争でもある自分の〈行動〉について、次のように語っている。

「私は時間的に[illegible]して生きているような気がしている。たとえば暦の上では一年前に起きた闘争が、あるものは時計でいえば二周していないし、あるものは一周以上しているような感じがある。無数の問題がそれぞれねじれた形で私たちに迫っている。私たちの自主講座運動は一年前に開始された。占拠している空間にやってくる全ての人が参加者であり、警察官もそうである。退去命令を出しに入ってきた教養部長に、あなたを自主講座の実行委員に任命する、と言うと、かれは非常によろこんだ。

私のやってきたことの一つは、全ての学生を落第させたことであり、不満をもつ学生には公開討論で単位制を批判し、納得させた。それにより、私は又、かって闘争に参加し、今は単位制の中に安住している学生たちを批判しようと思った。二番目は落書である。私は落書の概念を転倒しようと思った。人にかくれて〈かく〉落書から、公然と自己の最奥の表現を敵対者にとって重要な空間に出現させること。全共闘の学生たちも、いろいろ表現はしたが、奇妙なことに教室の黒板だけ残していた。そこへペンキの落書が登場したのだ。〈落書〉が自主講座運動として、また新しい形のバリケードとして展開されたのである。それに対する幾つかの処分請求（のちに告訴）は私という固有名詞をねらってなされつつあり、運動を破壊しようとしているが、逆に、これはかれらにとって視出不可能なものになるだろう。というのは私だけでなく多くの表現者が、何をどのように表現しているのか、その固有性において問われてくるのである。この試みにより、大学闘争の中で[illegible]問題が社会総体に突入して[illegible]。[illegible]を認めず、同じ暦に公開の反ゼミナールを行なった。これは今までの闘争の継続であり、かつ物理的、思想的な空間性の拡大をめざしている。かりに私の行為が見かけの上で成果がないとしても、実際には無数の応用を可能にしていくだろう。自主講座とは無数の〈行為〉を可能にする一つの遊びである。私たちは落書と同様に遊びの概念を転倒しなければならない。私のとらえ方では、遊びというものは私たちが原点や根拠を確信して独自の方法で貫徹するときにのみ可能である。そして私は、今まで私たちの発想を妨げていない未知な視点の根拠において、さまざまの問題を統一的にとらえようとしている。このような道は党派や政党の〈闘争〉と区別されている。というのは、まだ把握しえていない何かから出平するからである。大学においては幻想性が数[illegible]

沈黙の核をとりだす
自主講座運動と自由自在なハイネ
―ブリークレープのとらえた松[illegible]

大の擁護を示しているため、自分と大学当局の間の矛盾に全ての階級闘争の歴史が包括されてしまう。そこでは人間が言葉をもって以来の全ての問題が問われてくる。だからこそ、私たちの方法は現在の社会的位相の闘争としてアクチュアルなのであり、学問、文化、生命の形、発想の形、行動の形が極限で追求される。従って例えば、私たちの単位制に対する闘争を、表現の階級性の問題と結合しないで理解するのは誤りである。また私は、反抗する教師としてみられることをのぞまない。私は大学の内部でのみたたかっているのではない。いくつもの局面にはただ突出するだけだ。現在私たちが直面している困難さは、表現の階級性、空間性、連続性というテーマが大学の枠を越えて社会的位相で問われつつあることに対する私たちの準備に関してである。自主講座運動はいくつかの段階に分けてとらえきれないだろう。（略……）今年に入って取り組んでいる問題は、どのようにして〈政治的〉弾圧を粉砕するか、私たちの生活の時間を奪っていく時間をふくめて組織化する方法は何か、ということである。ここで〈他者の中にいる私〉〈みなの中にいる私〉〈どこかにいる私〉の運動の統一的展開が必要になってくる。……[illegible]

どのような議論をこれについて行なっているか、私は知らない。単位制や試験（知識人の品種改良選別機構）について、このような座談会の場で正当に語っていいとは思わない。警察官がバリケードをこわしにやってくるような場においてこそ、正当に論じうるであろう。このような時期は過ぎ去ってはいるが、前記の問題は、現在のより不確定な解決不可能な問題群がみちている情況の中でこそ、より一層問い続けられねばならない。私はこのことを言うためにだけ、この座談会に参加したのである。私たちはバリケード空間を自己の内部に構築しつつ全ての課題に立ち向かうときに、多分、私たちの試みやその持続性が判ってくるだろう。私についていえば、このバリケード概念は必然的であり、私をどこかにいる私たちと結合させつつ、〈私〉としてバリケード構築の作業を持続していく。表現というものは、ひとたびなされた限り、最後まで運動させられねばならない。自主講座運動とは、そのような運動なのである。この運動の前には、私をつき動かす未知の領域がひろがっている。この空間（研究室）に参加している人たちのかかえている制約は、逆に運動の媒介になりうるのである、ということをいうために今、私はここに存在しているのだ。[illegible]自主講座運動の最後の、名づけがたい段階を生き抜くためには、私は[illegible]

[illegible]る。自主講座の現在は正にそうであり、私たちの[illegible]まわりの言葉を死んだものとしてとらえ、古典も死んだ読まれ方をされていると考える。真の言葉は古典の〈向こう側で〉沈黙しているのである。ここでも〈沈黙の核〉をとり出す作業が必要なのである。……私たちはあらゆる空間から排除されても、いかなる権力も破壊しえない空間性を創出し、一人きりになってもたたかいうる拠点をめざしている。一人一人が、いや応なしにかかわった闘争過程において〈自己の〉表現を発見し、それを自分だけの言葉でなしに他者の中にいる自己と共有する言葉にしていけるかどうかに、運動の持続性と根源性はかかっている。抑圧されたものたちの表現はあまり知られていない。それらの抗議の声は、ある条件においては耳にとどくけれども多くは沈黙したままである。私たちの任務はここでも又、〈敵対者〉や〈古典〉に対して行なうように、沈黙の核をとり出すことである。私はこの方法を単に反射的にやっているだけではない。私は沈黙の核をとり出す際に、人間のあらゆる感覚を解放する過程でやっていく、というのは、私は人間の本来的な晴れやかさを信じており、もっともよく笑うものが最後に勝利すると考えているからである。どのような抑圧の下にあっても私たちは笑っている間は、笑うことのできる限りは勝利している。このような過程における私は〈私〉、つまりカッコの中の自分である。なぜならば私はこれまで、どれほど多くの複数の私が存在するかを経験しているからである。いや、いや、私は決して独自の私ではなく、傍観などではない。その[illegible]がいて、その数だけの主体性があるわけではない。相互の複数的なものの把握が肝要であり、主題の確定は重要ではない。私たちは現在の情況や闘争と対等なテーマをもっていない限り、必ずそれに従属し、屈服することになる。これはとくに左翼の人たちにいうのである。多くのものはこれまで直接的な体験をそのまま理論化、運動化しようとして失敗してきた。'60年の安保闘争にしてもそうであり、その固有かつ普遍的なテーマをわずか10年間持続、発展させることさえできていない。かれらの発想のリズムはかれらの直接的な経験、記憶のリズムで消え去ったのである。今度の大学闘争でも同じことになりそうで、これは怖しい問題である。

さいごに〈バリケード的感覚〉という言葉について語りたい。ブルジョアジーの新聞・雑誌が[illegible]

▽…… その[illegible]

[illegible]ここまで[illegible]夕ネをか[illegible]の松下研[illegible]ドナの[illegible]教授会あ[illegible]る。[illegible]ごく少数の[illegible]松下の力強い[illegible]にかかれ、処[illegible]の表現論の中[illegible]関する序論〉[illegible]の詩人をわが[illegible]究し、ハイネ[illegible]鏡の源泉とし[illegible]論描たえまな[illegible]人我々、遠方[illegible]のズレに近代[illegible]関ができて[illegible]究大から〈一行[illegible]〈へのたたかい[illegible]とながら、〈[illegible]を発見してい[illegible]おける言葉[illegible]闘の序を告げ[illegible]作品の本文に[illegible]ちに記す序文[illegible]出している、[illegible]のハイネ論を[illegible]拡がりにおいて[illegible]的宇宙への[illegible]ハイネ研究には[illegible]在である。私[illegible]現してみること[illegible]「今まで[illegible]ら離れつつあ[illegible]じめてその時〈[illegible]を手にしてい[illegible]

私が私たちの[illegible]と試みる際に、[illegible]夢のようにしか[illegible]づまり、うつろ[illegible]影を落とす。そ[illegible]なぜ序文が多い[illegible]る。

私たちはハイ[illegible]境域を追求する[illegible]りよく理解し得[illegible]生じる疑問は、[illegible]的に規定されて[illegible]にあり、あとで[illegible]この二つの要因[illegible]躍する詩人ハイ[illegible]ゆらめき出る空[illegible]ば、かれが疑問[illegible]検閲について語[illegible]序文は作品の[illegible]は包括の結果と[illegible]における生誕と[illegible]式をとって、性[illegible]いだろうか？[illegible]をもっている。[illegible]語るとき、表現[illegible]解釈を意味する[illegible]

、私たちの
え、古賀も
。真の表現
のである。
が必要なの
から挑発さ
空間性を創
る表現をめ
にかかわっ
発見し、そ
にいる自己
に、運動の
されたもの
それらの抗
とくけれど
の任務はこ
して行なう
る。私はこ
はない。私
らゆる感覚
のは、私は
り、もっと
えているか
ても私たち
限りは解剖
は〈私〉、
ならば私は
存在するか
や、私は決
ない。その
みよ、何人
わけではな
裏であり、
現在の閉塞
限り、必ず
これはとく
のものは、
運動化し
闘争にして
テーマをわ
できていな
運動の媒介
いうために
現述べた自
解を生む装
ざえもめり
命して自由
解放を獲得
と方法の変
ら。」
に歩み迫っ
に不利
差を敢然と
外部状況の影響を受けている。権力との関係と
等の設定から。それぞれへの反感から、かれは
食を強いて飢えた学生らに食べさせた。
その行為（餓死）の時期は長くはなかったけれ
ども、その行為（餓死）の衰弱はずっと伸えてい
るということである。

ここまでは『3・17』に、ヒマワリの
タネをかじりつつ『71・4・8』以降吉祥寺中
の松下研究室で翻訳した。
↔
ドアの外に貼り出した『3・17』付の
教授会での撤去を求む抗議の張紙がある。

▽……△

そのハイネ論

▽……△

ごく少数の人々にしか知られていなかったが、
松下の力強い引き出し作業は、すでに1966年
にかかれ、約2年後の1971年に発刊されたかれ
の表現論の中に収められている『ハイネの序文に
関する序論』の中に暗示されている。かれは早く
の詩人をわがものとするに根源的かつ批判的に研
究し、ハイネと私たちの間の表現を全く新たな認
識の連関として出現させている。知識人が、その
動揺たえまない言語によって、自己批判をこめて
〈我々、変革的なものは〉とかたる場合の本質と
のズレに近代史のさまざまの矛盾が開示される空
間ができてくるのだ。松下はこのドイツの詩人
へのたたかいから自己検閲（屈服）への回路を論
じながら、『パリ・ゲーテ』の歴史的段階の変
を発見している。ここにはすでに自主講座運動に
おける表現づかいが認められ、やがて開始される
詩の序を告げているようである。ハイネはかれの
作品の本文にではなく、序文に（本文をかいた
のちに記す序文に）はじめて自己を示す場をつくり
出している、という驚くべき指摘がある。私はこ
のハイネ論を読んで、ハイネがその内部的宇宙の
拡がりにおいて把握されているのを感じた。内部
的宇宙の拡がりの方は、今までドイツの
ハイネ研究には全てられたことがないほど自由自
在である。私は、かれのハイネ論から数ヶ所を抽
出してみることにする。

これは怖しい、「今まで親近した詩人が自分の論理する動機から
しだいに離れつつあるのを予感するとき、私たちは、は
う表現につ
ても手にしているのかもしれない。
雑誌が一

講座運動

ハイネ論

とらえた松下昇像

ているか、
私が私たちの表現や戦後史の視点を表現しよう
の品質改良
と試みる時に、ハインリヒ・ハイネのことは強い
会の場で正
夢のようにしか思い出さない。しかし、私が行き
がバリケー
づまり、うつろな休息をしているとき、ある瞬間が
いてこそ、
影を落とす。その疑問とは、ハイネの作品には、
時期ほどな
なぜ序文が多いのであろうか？　というものであ
のより不
る。
情況の中で
ない。私は
会に参加し
・りよく理解し得るだろう。前記の疑問の対として
生じる疑問は、作品が完結性を帯びていると一般
自己の内
的に想定されている視点からは、序文は作品の外
うとき、
にあり、あとで付加されたものではないのか？
ってくる。
と試みる。
ド展示は
この二つの疑問を引きうけつつ、私は次週に開
催する詩人ハイネの特質を序文という作品の外へ
ゆらめき出る空間で見出そうとしている。たとえ
ば、かれが検閲の厳しさに慣れつつ、本来の自己
検閲について語ってしまう場合のように。
である。こ
序文は作品の基礎にあるとはいえ、表現形態で
の領域がひ
は従属の結果として位置している。ハイネの検閲
参加してい
における生活と闘争の内的関連が、序文という形
運動の媒介
式をとって、他の場合より強く現われるのではな
いうために
いだろうか？　また、かれは状況の転移について
現述べた自
語るとき、表現方法の転移をも語ってしまう特質
解を生む装
をもっている。たとえばドイツからフランスへ亡
ざえもめり
命して自由になることが、かれにとっての文体の
解放を意味する、というように。このような状況
と方法の変化の関連性は、かれの序文にも折明確
に歩み迫っ
に示され、読者の眼には自己増殖性のあやうさと
差を敢然と
外部状況の影響を受けている。権力との関係と
等の設定から。それぞれへの反感から、かれは
食を強いて飢えた学生らに食べさせた。
その行為（餓死）の時期は長くはなかったけれ
ども、その行為（餓死）の衰弱はずっと伸えてい
るということである。

ここまでは『3・17』に、ヒマワリの
タネをかじりつつ『71・4・8』以降吉祥寺中
の松下研究室で翻訳した。
↔
ドアの外に貼り出した『3・17』付の
教授会での撤去を求む抗議の張紙がある。

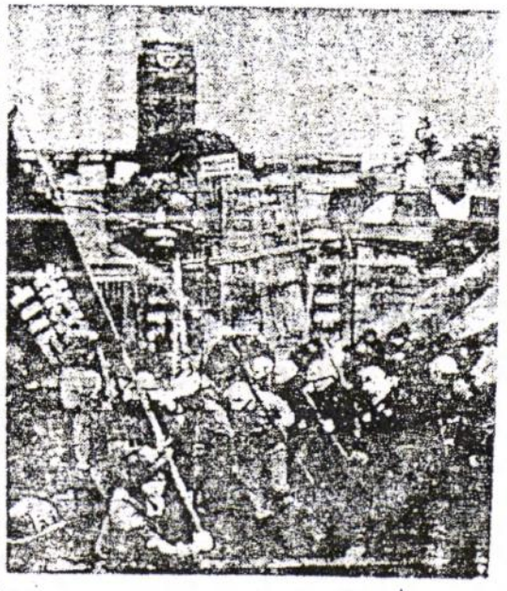
▽……△

そのハイネ論

▽……△

ごく少数の人々にしか知られていなかったが、
松下の力強い引き出し作業は、すでに1966年
にかかれ、約2年後の1971年に発刊されたかれ
の表現論の中に収められている『ハイネの序文に
関する序論』の中に暗示されている。かれは早く
の詩人をわがものとするに根源的かつ批判的に研
究し、ハイネと私たちの間の表現を全く新たな認
識の連関として出現させている。知識人が、その
動揺たえまない言語によって、自己批判をこめて
〈我々、変革的なものは〉とかたる場合の本質と
のズレに近代史のさまざまの矛盾が開示される空
間ができてくるのだ。松下はこのドイツの詩人
へのたたかいから自己検閲（屈服）への回路を論
じながら、『パリ・ゲーテ』の歴史的段階の変
を発見している。ここにはすでに自主講座運動に
おける表現づかいが認められ、やがて開始される
詩の序を告げているようである。ハイネはかれの
作品の本文にではなく、序文に（本文をかいた
のちに記す序文に）はじめて自己を示す場をつくり
出している、という驚くべき指摘がある。私はこ
のハイネ論を読んで、ハイネがその内部的宇宙の
拡がりにおいて把握されているのを感じた。内部
的宇宙の拡がりの方は、今までドイツの
ハイネ研究には全てられたことがないほど自由自
在である。私は、かれのハイネ論から数ヶ所を抽
出してみることにする。

これは怖しい、「今まで親近した詩人が自分の論理する動機から
しだいに離れつつあるのを予感するとき、私たちは、は
う表現につ
ても手にしているのかもしれない。
雑誌が一



きかえた脱しることなく行なっている。これは一
種の調整機能のバリヤーともいえよう。
このようにふるまいつつも、かれは次々と新しい
テーマと対決していく。そして国家の機関や出
版社・読者の範囲の他に、第三の内的地平が生じ
てくる。序文や外的時間のための言いつつ作者の
思想の変化を告白している。これは批判であろう
か、それとも自己批判であろうか？　私は、これ
は政治的な局面にしてではなく芸術家の思考の
ために次のでもなく、ハイネの内部表現の展開へ
の新たな一歩と考える。かれ自身述べ
ているように「現実ともつれ合い結び合い、その
中に閉じこめられている」と思われた領域への侵
入は表現主体がある危機に直面した時、さまざま
な形をとって表現の表面へと浮上してくる。……論
理は循環りにされ、ハイネは入なにものかいえを語
るのである。」

松下はここで、コミュニズムとの関連でのハイ
ネの感性について考えている。そして次のように
提唱する。「ハイネとは、静的な作情を、状況を
媒介として、それがいきおって次元をまで変革し
ながら、止むを得ず運動させていった文学的事件
である」と。正にその通りと思う他はない。さら
に松下は述べている。

「さまざまの時期、内容、態度の現象学を、分
裂しながら走り抜けていくハイネ的な変革主体
を、現実過程の歴史と幻想表現の歴史のある交差
点が要求し、かれを通して私たちに問いかけてい
る。ローレライのひとつが『歌の中に生き続けて
いるように、ハイネの文学的実践の時々を、一
時と国境を超越する表現的にいる私たちを媒介的に受けと
め、発展させていかなければならない。その時、
ハイネの人なぜかは判らないが〈〉の構造の関連、力学の分析が
必須の課題として浮かび上がってくる。しかしそ
の作業の課題は、この序論とは別の空間と時間に
属している。ここまでかいてきている今、序論と
いう形でしかかけない説明があるのではないか、
という新しい疑問が洞のように突きさってくる。」

きかえた脱しることなく行なっている。これは一
種の調整機能のバリヤーともいえよう。
このようにふるまいつつも、かれは次々と新しい
テーマと対決していく。そして国家の機関や出
版社・読者の範囲の他に、第三の内的地平が生じ
てくる。序文や外的時間のための言いつつ作者の
思想の変化を告白している。これは批判であろう
か、それとも自己批判であろうか？　私は、これ
は政治的な局面にしてではなく芸術家の思考の
ために次のでもなく、ハイネの内部表現の展開へ
の新たな一歩と考える。かれ自身述べ
ているように「現実ともつれ合い結び合い、その
中に閉じこめられている」と思われた領域への侵
入は表現主体がある危機に直面した時、さまざま
な形をとって表現の表面へと浮上してくる。……論
理は循環りにされ、ハイネは入なにものかいえを語
るのである。」

松下はここで、コミュニズムとの関連でのハイ
ネの感性について考えている。そして次のように
提唱する。「ハイネとは、静的な作情を、状況を
媒介として、それがいきおって次元をまで変革し
ながら、止むを得ず運動させていった文学的事件
である」と。正にその通りと思う他はない。さら
に松下は述べている。

「さまざまの時期、内容、態度の現象学を、分
裂しながら走り抜けていくハイネ的な変革主体
を、現実過程の歴史と幻想表現の歴史のある交差
点が要求し、かれを通して私たちに問いかけてい
る。ローレライのひとつが『歌の中に生き続けて
いるように、ハイネの文学的実践の時々を、一
時と国境を超越する表現的にいる私たちを媒介的に受けと
め、発展させていかなければならない。その時、
ハイネの人なぜかは判らないが〈〉の構造の関連、力学の分析が
必須の課題として浮かび上がってくる。しかしそ
の作業の課題は、この序論とは別の空間と時間に
属している。ここまでかいてきている今、序論と
いう形でしかかけない説明があるのではないか、
という新しい疑問が洞のように突きさってくる。」

ここまでは、'71・4月号（入与掲）中
の京大教養部A号館3階のドイツ語資料
室『ハゼロックス室』で'73・4月から
（吉本）市を加えた3名で翻訳した。
（訳・自主講座実行委、小見出しは編集部）

「自主講座実行委」とは

この文章は訳著である「自主講座実行委員
会」について、ひとこと説明を付け加えておき
たい。一九六八／九年に始まった大学紛争
のなかで、神戸大学教師だった松下昇氏は、
学生たちとともにバリケードのなかで自主講
座を開始した。翌春が外的に消滅したあとで
も、その自主講座は、場所を転々その他にも
拡がりながら、なお続けられている。京大との
関連でいえば、教養部学生が松下氏を講師と
するドイツ語ゼミナール（いわゆる自主ゼミ）
を、教養部にたいして強硬に提案したことが
ある。これは教養部教授会で否決されたため、制度上のものとしては実現しなかったけれ
ども、制度のそとで、自主講座実行委員会
の名部での一環として、存続していた。いや、
いまも存続している、というべきなのかもし
れない。松下氏は一九七〇年、神戸大学から
「免職処分」を受けたが、その当・不当をめ
ぐる人事院審理は、民事・刑事訴訟（大学内
で解決されるべき問題を神戸大学が提訴・司
法権力の手に委ねたために生じたもの）とと
もに、いまなお引き続いている。

（野村 修）

朝日ソノラマの本

就職のための企業研究、最新情報を満載!!

ザ・会社シリーズ

'80年代を生き抜く100社の経営と体質

第一線で活躍中の経済ジャーナリストによる徹底取材と分析

新書判●各580円

金属
新日本製鉄　世界のリードする
川崎製鉄　実践する野武士集団
日本軽金属　富士山型企業に挑戦する
日本鉱業　非鉄金属と石油の複合企業

自動車
トヨタ自動車工業　世界に挑む"三河気質"
日産自動車　技術力で勝負する
東洋工業　広島に育つ名車の伝統
三菱自動車工業　ワールド・カーの伏兵
鈴木自動車工業　軽四輪のトップ

電機
日本ビクター　ビデオで勝負
富士通　IBM王国を脅かす
パイオニア　映像ソフト進出する音響の王者
京都セラミック　粉体日本一
カシオ計算機　電卓一発！開発の成長
東京芝浦電気　21世紀型総合企業をめざす
東京電気化学工業　成長のアンバランスの修正急務
日立製作所　難関技術で世界に挑戦する

化学
住友化学工業　日本を代表する総合化学会社

機械・造船
三菱重工業　日本産業界の王国
津上　動く工作機械の名門
石川島播磨重工業　総合技術力で21世紀をめざす

精密・カメラ
富士写真フイルム　映像メディアを先導する
セイコーグループ　極限の技術に挑戦する
キヤノン　90年型企業へダッシュする
ミノルタカメラ　映像時代のフルブランド

繊維
レナウン　「楽しさの時空」を貫くスポーツ・アパレルの旗手
デサント

エネルギー
日本石油　石油の安定供給に全力投球する
出光興産　総合エネルギー企業をめざす
東京電力　原子力に賭ける
東京瓦斯　クリーンエネルギーに燃える

商社
三井物産　生かせるか攻めの体質
住友銀行　変化時代のパイロット
住友生命　生保業界のニューパワー
野村證券　世界一の投資銀行へ
山一證券　金融界の国際化をリードする

航空
日本航空　巨気流時代を翔ぶ

交通
朝日新聞社　新地新時代を迎えた
フジテレビジョン　民放界のチャンピオン
東京放送　民放界のチャンピオン
電通　情報化社会のリーダー

通信
日本電信電話公社　世界に展開するマンモス公社

建設
鹿島建設　建設業界のバイオニア
ミサワホーム　木質プレハブ界の王者

食品
日本郵船　世界の海をネットする
サントリー　生活文化企業へ飛躍する
キッコーマン　味のワールドブランド

任天堂　話しい遊びを演出する
日本専売公社　世界最大のタバコ会社

医薬
本田技研工業　世界へ急伸する
三和銀行　高度にセールスマンシップ的銀行
国際電信電話　21世紀の情報産業をめざす
日本生命　世界最大の生保会社
日本鋼管　技と資本の総合企業

就職新地図

行政監理委員
元朝日新聞論説副主幹
八木 淳・著

●四六判／900円

大卒者の就職を、構造変化の分析から対策まで最新のデータで解明する

省エネ、国際化、産業構造の変化を軸にして就職構造も大きく変わった。「なぜこの会社を選ぶのか」――生涯設計の第一歩としての「就職」を取り上げた実践的案内書。

朝日ソノラマ　〒104東京都中央区銀座4-2-6 TEL03(563)6021-3